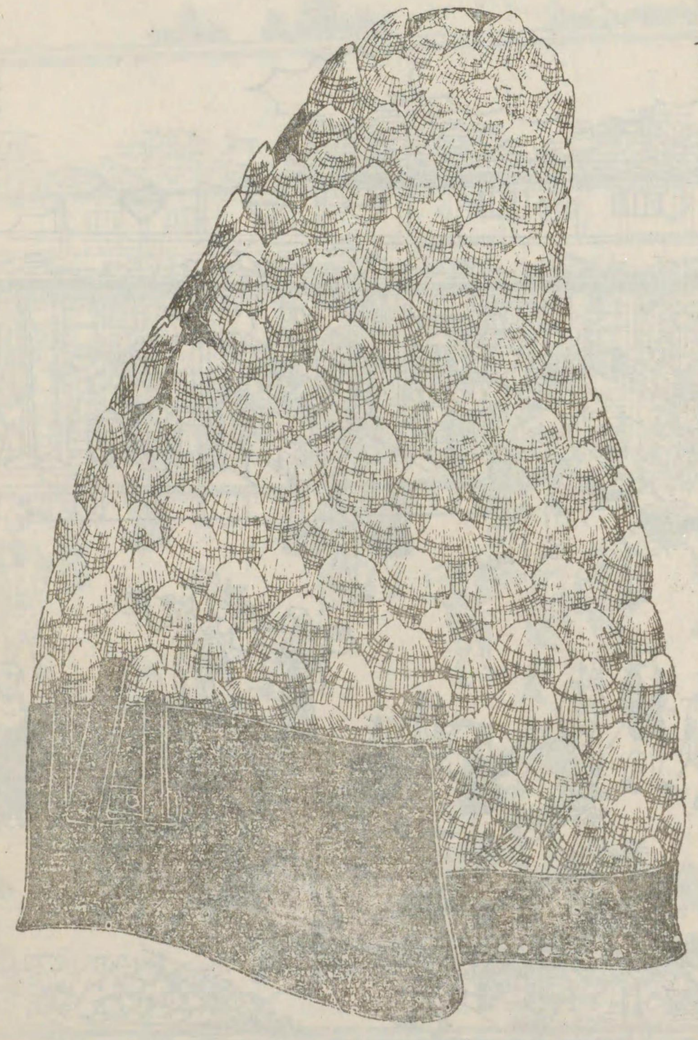
赤松圓心木像

赤松院所藏

廣隆縮寫

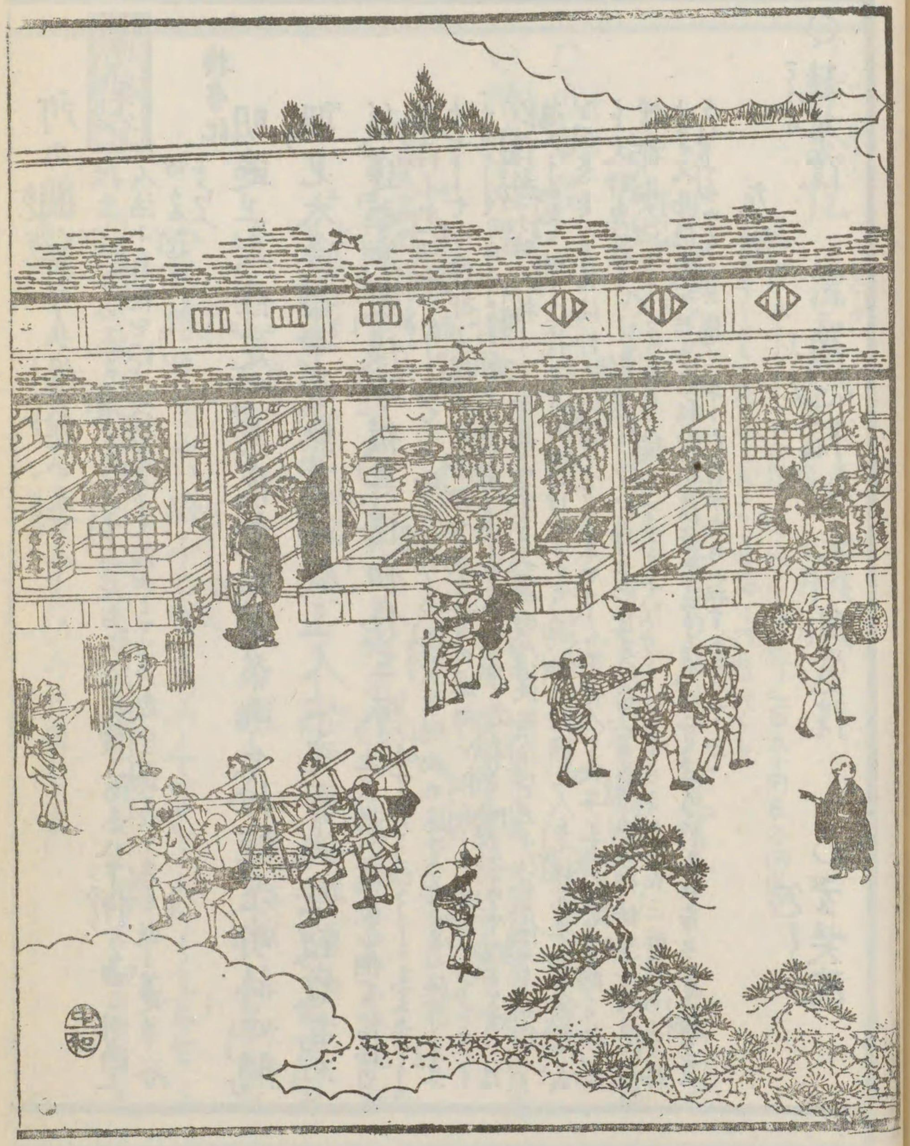
貝冑　圓心着用ト云フ

同院藏



廣隆縮寫

蓮華谷六軒店
珠數屋



所の圓盆なり縁起ふ妻し

蓮華谷

往生院谷の東に續きて往生院の左右に壇上の赤八丁許に亘る明遍上人法ふ自在とわく此他と異なりて浄土と号ぶ故室蓮花を生ぜ故に蓮華谷の名起る

頼房記

明遍上人住定中其夜所觀蓮華漸々相舒光明赫如開眼見大蓮華中有無盡莊嚴上人心魂廓然感動暫有而後蓮華漸斂復本從其得初位三昧上人姓い藤原少納言信西の季子なり幼少より東大寺の華厳一光明山の住侶を三論の密教を醍醐の僧侶に学ぶ海印三昧十七にして少僧都に擢く上法相維摩会の講師を勤め其声天下に響く十九にして高山に遁れ遁世を求む遂に壇上の中間に草庵を結ぶ一切を捨て時人称して聖房と号す一時浄土宗の祖師法然上人弟子となり西方の要義を大師多くの人に授く上人一夜母養の恩と大師に祈求し傳都に赴く影現して浄土の要文を授け給ふ上人一百日の蓮花三昧院の手法を行道す蓮花又開く仏の本願と称す又弟子の中に貞慈三年六月十六日寂す之年八十三

龍華院　○隨心院　○自覚院　○玄奘院

左側

○赤松院　檀契久我侯　肥後侯　久留米侯　五井侯

享保五年の冬中興院に赤松律師二百五十回忌の法筵を設け給ひて法福の行数はてゝ

いとゝ志のぶ仏の恵ふかの松の人をなつかしむ　赤松則元

藤原良雄

○成就院　○知識院　○浄花院　○恵心院

○清浄心院　檀契佐竹右京侯　松平大和侯　上杉弾正侯　本多豊前弾侯　御生倶馬侯　松前隆之助　石川中務侯　大関豫之侯　佐竹壹岐侯

○廿日大師

竹村氏高野紀行云

傍坊よりこめぐりて廿日大師ふ後づこの本堂に祖院

生利益の為ふ像をこめぐりて書せ

叶院ふ安置し給へり

り像の背ふ微宝管とこめぐりて書せ

まつりとなん仁辻亜相の名歌

歌をみるに廿日大師とかゝるも

やはしの廿日なるべ

○中性院　○浄心院　○松壽院

□阿字観堂　檀上を去る九十丁ばかりにあり　本尊阿弥陀如来

○清德院　○微雲院　○元興院

○大圓院　檀契　主花家

右側

○萬蔵院　○法眼院　○上生院　○壽命院

○明王院　檀契　森川内膳侯　松平和泉侯　永井飛弾侯

○龍生院　檀契　石川日向侯　堀尾家

擁護山房鎮一泉神竜蟠居定多年兼知芳契慈尊曉　釋立詮

後曾期遥九五天

○蓮壽院　○阿咄院　○毘沙門院　○増福院

○來蔵院

○恵光院　檀契　島津侯　松平隠岐侯　○泉德院　○養壽院

○刎泉院　○梅松院　檀契　阿波侯　阿州稲田氏　○佛心殿院

○光明院　檀契　紀府久野大夫

○持宝院　薄蔭紀行

持宝院ふまりぐく絵谷蓮生法師の木像をえるうの集石十種小載りまるようも殊勝なり此院を智鐵院といひ蓮生寓居して紙ひとを伴ひくくもとの人絵谷寺と

いとうかの法師あるはよ

絵谷のあれハ中ふまでは弥陀のくくひ

いとうへの燈ふまるる紙和の風のいるおもとりざりくり

通仏のもりくさなりざりしまるひやくる

○上珠院　檀契　牧野戾　○常慶院　檀契　水野一義

○愛染王院　○十輪院　○金性院　○五大院

○持宝院

□丈六堂　檀上と云へり　十七町余東　本尊丈六阿弥陀　座像　法聖丹心の製する所

仁平元年　鳥羽法皇の御願堂なり

□五大尊堂　丈六堂と云へり　南五丁ばかりにあり　本尊不動明王　大威徳　降三世

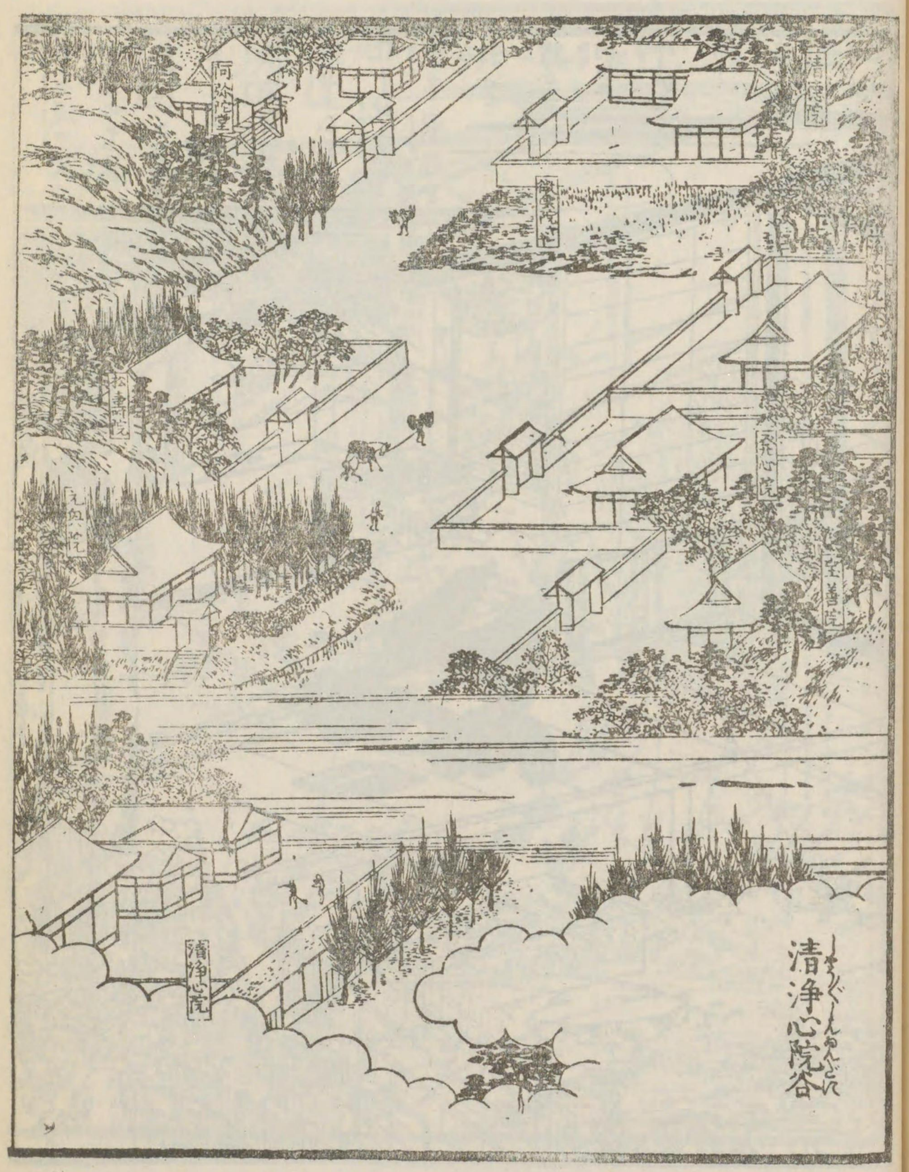
軍荼利　金剛夜叉

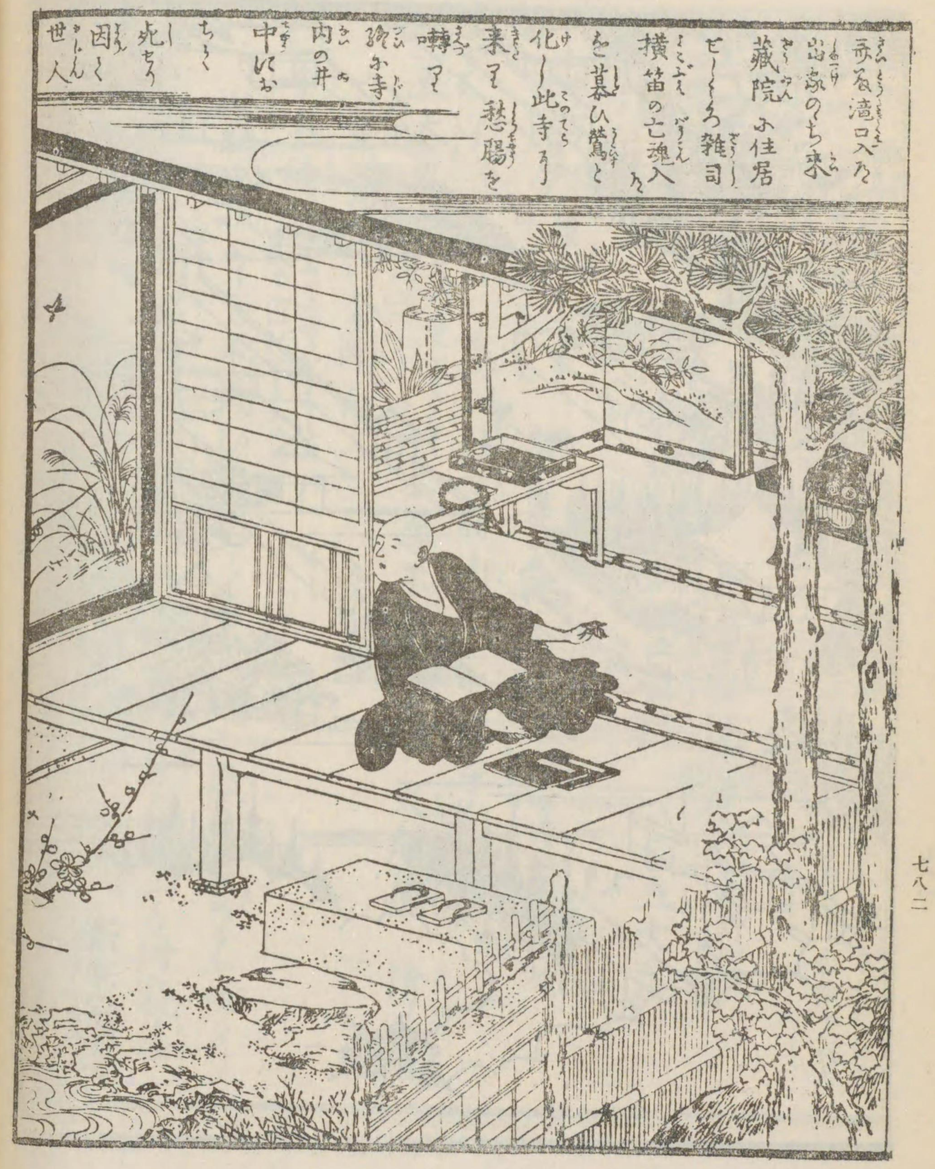
□千本槙　五六町の堂なり　十町余深林中にあり

山路一根みな千株むらがり出て事一抱に過ぎず木挾みたる似なり

鼻祖大師虚空蔵求聞持の法を修行なさるる時願成

とは此地なり　此の所に寺院の所為なるべしとの事




夜毎滝口入り
出家のくち来
藏院ゟ住居
ヒ〳〵ろ雜司
横笛の亡魂入
を暮ひ鶯と
化し此寺ろ
来り愁腸を
轉り
弥か寺
内の井
中にお
ちく
死ろ
因く
世人

其井
を学
の井と
いひ
其辺
の梅
を
鶯
梅
を
てとゝ

あるまでかくれなく繁茂するによりて山中すべて槙の一種とす
これを採りて樒の代にしるし用ゆ故に世人是を高野槙と称するなり
みそしの一目あたりのさかりより槙をもてとりゆへさ

霊巌寺
無涂

〇本王院

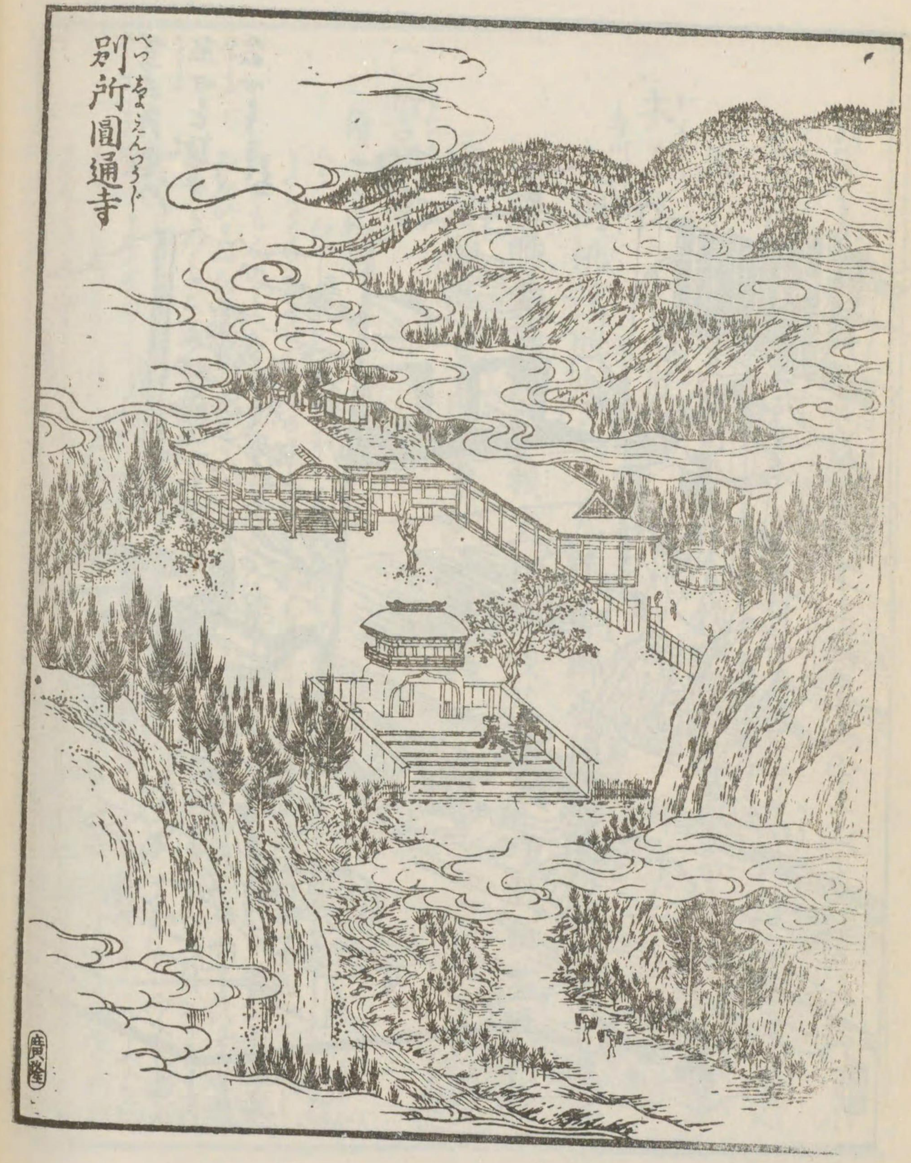
春川詩草　三月二日集本王院

千樹桃花照席丘人先佳節酔香樓林間飲澗過玄鹿塔
上喚晴啼錦鳩松籟更和仙唄落鐘聲時出白雲流明朝
縦赴蘭亭会高興争如蓮社幽

〇誓願院

續今昔物語

今はむかし京三條にはりの小路に師といふ男ありけりぞふるく思しくせん
ところやありける妻のすむ所かくれ給ふさわかくれありしく
我をもんのみつすくさせてまへさりぬいひまくしむすとおひし男もあろかや
あるひるひをとざやうのやうとしく年月をやうぬあるとき尋ぬへてあやかりし女の
下女とおくに立ちてすくるを計男うけへりふとえつけてむかへに人目ありけるに
その女とらしよくさしころしてまねぶるはぐどよりふり血のつきたるをとりてかくし家に
おくりぬまでかくあまりうなる衣ぐらからしと女なかぐ袋もひとやてさうんうなかぐり
ものてはまへまさとにのしるもかるを男きてうへりみて女とらつたかは
かくすでなくめしぬりのかたとあかしひへくるところにつやがてあはむしく



別所圓通寺

○萬福院　○智性院

○蓮華三昧院　檀契　森川内膳侯　三浦備後侯

○明泉院　檀契　長州宍戸氏

○東根院　○常住光院　檀契　稲葉侯

○智門院　○瑞雲院　○正壽院

○戒定院　○見樹院　○雲聖院

○理趣院　○延命院　○丹生院

○岩本院　○梅林院　○尊勝院

十八景

夜々月明幽砌中　普賢鏡智踐高風世移人易山猶舊　雲石堂寂本　御中明月

□別所圓通寺（往生院谷の南に行き深林中にあり）本尊釋迦如來

虛空藏菩薩（靈岳山律藏院と云ふ）二尊ともに深夢師の作なり　地藏尊（世に火燒の地藏尊と稱す寺記に云ふ）

昔智泉大德（こゝに）の処ふ行を抑止の地に萬樹翠々と

凝々一鳥鳴て清溪珠と吐く流雲幕を垂る定侶禪客

の宜く棲遲すべきところ幽地中の幽地とすべし　大德奄化

のち漸荒蕪せしに中頃俊乘坊重源師あり東遍して

所謂重源逐電々高野に向ふ此処なるべし長明が

発心集に齋所推助成清が子親鸞かくるゝ遁世

々々と重源上人ありがゝるゝ言野に

新別所と呼あり我往生院谷の処に不斷念佛を唱へ一

邊に往生極樂と移る外他の営なし早く彼衆に

連て念佛の功つもらんと言野へ移りぬ云々

後山口重政と云者あり少々

髮々深夢と云本院の荒廢せるを大に悲願を発し

堂宇々々維新

歷代の尊牌を安置し冥福を祈誓し

中藏院主良永俊賢師を請し中興す俊師

し律家の法幢を建て洲博なりその窓門

師事教を達す曾て藝苑福王寺主法忍師

紹し開祖表制の清規三學の二緑を

專有部律を興起し言宗の僧の持する所の

律を定む今末寺院及び福王寺と云ふ有部律

一家の教を称し德行

右院々年中の勤行中に光明眞言土砂加持と云ふ

抑不空羂索經小說に呪の大灌頂光明眞言に大毘盧遮那

神君に奉仕し後祝

神君の嚴像

と無量壽如來との両軀の如來は心中の神咒なり一遍誦すれば百億無量の法門を誦し畢るよりも最勝なり光明真言經に說たまへる光明持念の行者は命終の時に臨て彌陀如來自荷負して極樂へ引導したまふ又死者の為に真言一遍を誦せば必ず無量壽如來死者の為に手を授けて極樂淨土へ引導したまふ猶十遍百遍あるひは千遍万遍ほどこすべし功德の大なること諸經に説たまへり道綽禪師安樂集に此真言と共に土砂を加持すること一百八遍して屍陀林の中なる亡者の死骸の上に散じ或は墓の上塔の上に散じ隅ごとに皆是を散ずれば土砂に觸れて光明の全身なりこれを照觸する所の利益難思議なり功德実に空しからず真言一家の院々累代先師の追福に更なり信心の道俗男女十方の檀越過去の亡魂追資の為に土砂加持の法莚を營んで願ふ時は道場を嚴飾し廿五人の衆僧を請じて一日六座勤行をなすべきなり光明真言土砂加持とは

興陀元

蓮華谷の東渓に奥院の地千載の老杉百丈の古檜鬱蒼として蔭を結び絲ふ日影を窺ふ只清泉瀝々天風聒々として幽邃寂寞塵寰と隔つるが如し

入道奥院百

続後撰

あとたれて　ちとせをすぎし　杉ぶるに　ちりかかるなり　法印覚基

続門葉

わけ入つる　谷そこ　ひろ　ひろ　ぬまの　ゆくへ　たづねて　おくの　山の奥　杜國

雪玉集

ゆくとても　天ぢなるものを　純の　ちりかかりしつ　雪中菴

無の　しるべ　ありて　おくの　ゆき　野坡

花を　たづね　ぬ　ぬ　奥の院

○一の橋　又大橋と称す都帳まで十八丁

間橋二つあり　樣子は

し橋より御廟に　道の左右に公家武家とぐろを巻く浮屠氏

も更なり　海内の諸名家農商の男女力士俳優のまでも

碑碣累々　幾千万とも数を尽さず各院ごとに守護

〻香華を絶さず菩提を弔ふ台座就中一番石塔の

如き高大眼を驚すあり朝鮮役士の碑なども武夫を慷慨

〻あり本阿弥の七石塔親鸞上人の碑の如き制作の奇

なるあり他列侯の俎先代碑大なるは銀碑に魁出して著く

小なるは殿宇を造り五采を装ひ輪奐たり或は花表を建

て或は石廊を廻らす趣さまざまいづれも皆高祖大師と

共に三會の曉を期すと深き因縁ある事なれば大略は

惣圖に載せり今古碑名區且神祠佛堂の類は方寸一を

尤も記次

性霊集高野御廟文

沙門遍照金剛敬白此道場者普以五類諸天及地水火

風空五大諸神並此朝開闢以来皇帝皇后等尊霊一切

天神地祇爲檀主伏乞一切冥霊晝夜擁護助果此願

倩哉大聖発卒降神爰自髫齔匪直也人乘槎浮海越境

問津甘露弘法大日施仁三昧示兆五筆盥嚢二朝傾首

萬葉禮塵館一卿ノ月ノ夜高野花ノ春 初證三一地一後遺全身ヲ入二金剛一定二昇一摩尼一林二民 受其ノ賜一奈何 大鈞

一の橋より南あらくまでたなびくの山の松あれども

主なしと名のみ残るものの山 光廣

名は大名小名ばかりなる 雲理

○鉄宇が芝 太例よりある又衆の頭の墓なり

○東谷 奥院山入口南の方に一基の門あり内に二十四の草屋並ひ孫行基井の未定三昧聖の墓所と云る中ノ坊東ノ坊角ノ坊などあり其ノ所の公卿諸侯の石碑諸寺院山内の所由あり年しるし土俗の石碑

○癩病庵 蓮華谷を去る

○本尊阿弥陀如来 大師

弘法國の時後年吾の出家なりしもの自開闢の時

全病と称し本尊と悲願と捨て給ひ子孫病苦と自知身を色無色と

現今病根と断ち平愈すること方便や爾のごとく血脈の子孫

大師加持力の法験もかぶらの信ぶ

○摩尼街道 東谷より通ず

○曽我兄弟碑二基 左側にあり鬼王の建る所と云鬼王の碑なり

○犬の墓 是上元應二年の俗あり

○法明上人碑 是上人八右昌周刹の受戒一座教を学び融通の切解を得る大徳なり河内駿通大会佛京の中興なり 鮮と真福院の傳記

○天神坂 此坂の天神の祠あるを名とす

○天神社 右側にあり天神は大師の化身なるゆえ祭るという人

○熊谷蓮生碑 左側にあり背ふ貞和二年 丹治忠直立之と彫る

名とげくもて 桜を蓮となりふくり 一笛

○平敦盛碑 蓮生の碑は側にあり蓮生つかうまつりし

そのかくもまふもふ 塚の露 成壹

○玉川 所謂六の玉川の一なり毒水なりと伝へ

溝川なり寛文十六年碑を建

たの歌を刻す

風雅集

寒玉幽溪傷二路邊一雲根繞出夕陽前 雲堂寂本 弘法大師

十八景

世尚傳一一首篇

栗三世寺淵

姑射山の新しき川
玉川よりかの
ちぎりやなりもち
玉川の水

蕪村

栗船

拾栗山人

○刀彫地蔵　大師刀を取り給ふる尊像なり

○行基菩薩碑　奉ふまぐ接ぐとなりて居るきやうの井のかくさ　碑

○佛供杉　同上を敬ひ佛供と崇ふる故と称す

惺窩文集

昂峰絶頂一龕雲高閣霊蹤隔俗氛百圍老杉僧臘老五千見棄梵文紛雙橋流潔小魚楽三宝更闡異鳥聞慈氏龍華開幾歳那伽太定約寄劫

○愛宕權現社　たゝあり

○數取地蔵尊　同上　俗伝に御願の輩に數を積しめ此石像旧破るゝ四斤なるゝ地中に埋没せしを延宝年間大坂の塗師多ゝ

とうの者夢を家にうつし所在を知り
穿出して是と合し尊像明らかなり

○塊亭碑 右にあり碑陰に五構亭
風圭の銘あり

勢ともなる香の子をうりや九百坊　塊翁

○多田満仲公碑 門上 此側か 南龍院殿勇を卸遺命あつく其碑を満仲とかつて建さめ
且その碑の大さも公
なえさせ給ふ千とかなし

○腰懸石 右にあり大師腰を
のせ給ふ

○蛇柳 門上 奚元の畔にあり三大蛇あり〻然時小大師持咒し給ひ
大蛇 他所にふくるゝを跡に柳生せり 因て此名あり一説に遠く是と
なんし蝦蟇蝶 くして石蛇乃遠逃とるが
つゝ因て名つけ ふかつて人形等めぐし

失木抄　正嘉二年毎日一首中

咲そめて錦地のかゝる壁山柳はたゝ糸をたれあつく　民部卿知家

○護摩石 右にあり大師の護摩
をさゝ給ふ 名なり

○世南碑 背面に黄名氏
乃銘文あり

ちやうかをすりなるたゝ今ぞ形置　世南　朱冠

碑文

文政十二年巳丑三月廿一日江戸神田郷佐久間街失火西北風烈火所延焼東
限墨水西暨外隍南至芝口其間茅宅市廛華為焦土男女燔死凡四千有餘
人其他避火溺水或逃亡無蹤者不可勝數也豈可不傷悼哀憫哉於是関法
筵於當山追福作善以為燔死群霊往生仏利之資矣因勒小碑以標其事云

爲江戸燔死群霊頓成菩提碑

○立合藤　右同上大師と明神とおなじ所にあり

○明智碑　同上世俗日向守光秀の墓と云ふ光秀の碑なりあるいは是全光秀の碑

○江戸失火焼死碑　右同上後文

○門脇宰相墓碑　同上

○護摩堂　同上大師後奉

○厳鴻明神祠　右同上

○慈尊院明神祠　右同上

○天野明神祠　同上

○中の橋　一の橋と中の橋とあるなり

極楽をもとめてうき橋の月

暉雄

○橋徳楼　右同上相傳上　嵯峨帝巡幸の日　御撮と嵯峨の橋下小

○流汗地蔵　同上

みすまの月のくもりの深汗地蔵のみまへ

焦熱のくるる佛もひるるの戒波のたもとはひえん　易興

世をそむく汗のくるれ桜ぞ　車光

○薬井　同上所名の井とい一延喜帝の勅使少納言平惟仲卿道中蔵王権現の若人専念遍照尊一度参詣高野山無姫眼疾忽ち癒し且此霊水を服せしめ給ひて敕を奉じて掘せりと

○住吉祠　同上

○熟田祠　同

○八幡祠　同

○天照大神祠　同

○春日大明神祠　同各新傳の時代譜なり

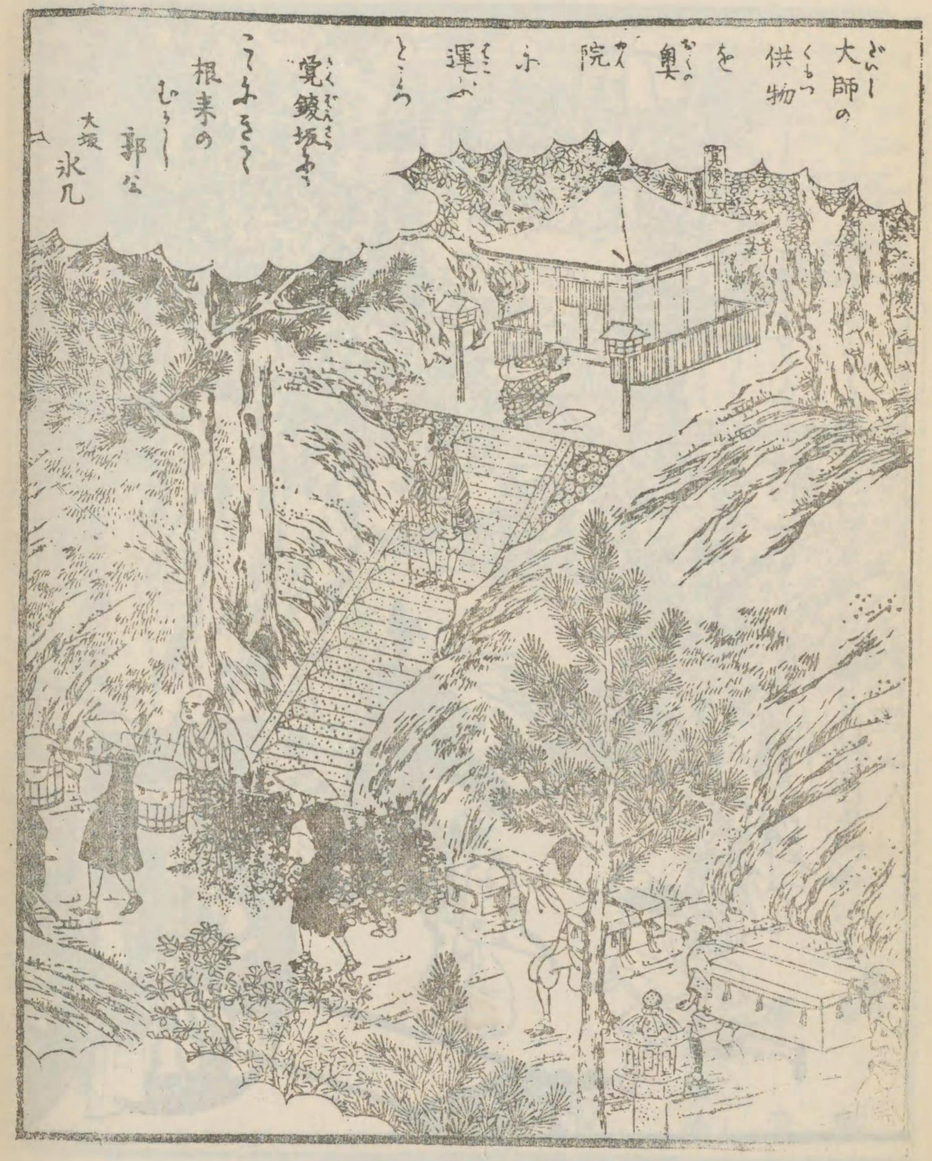
○逢坂　逢坂の関

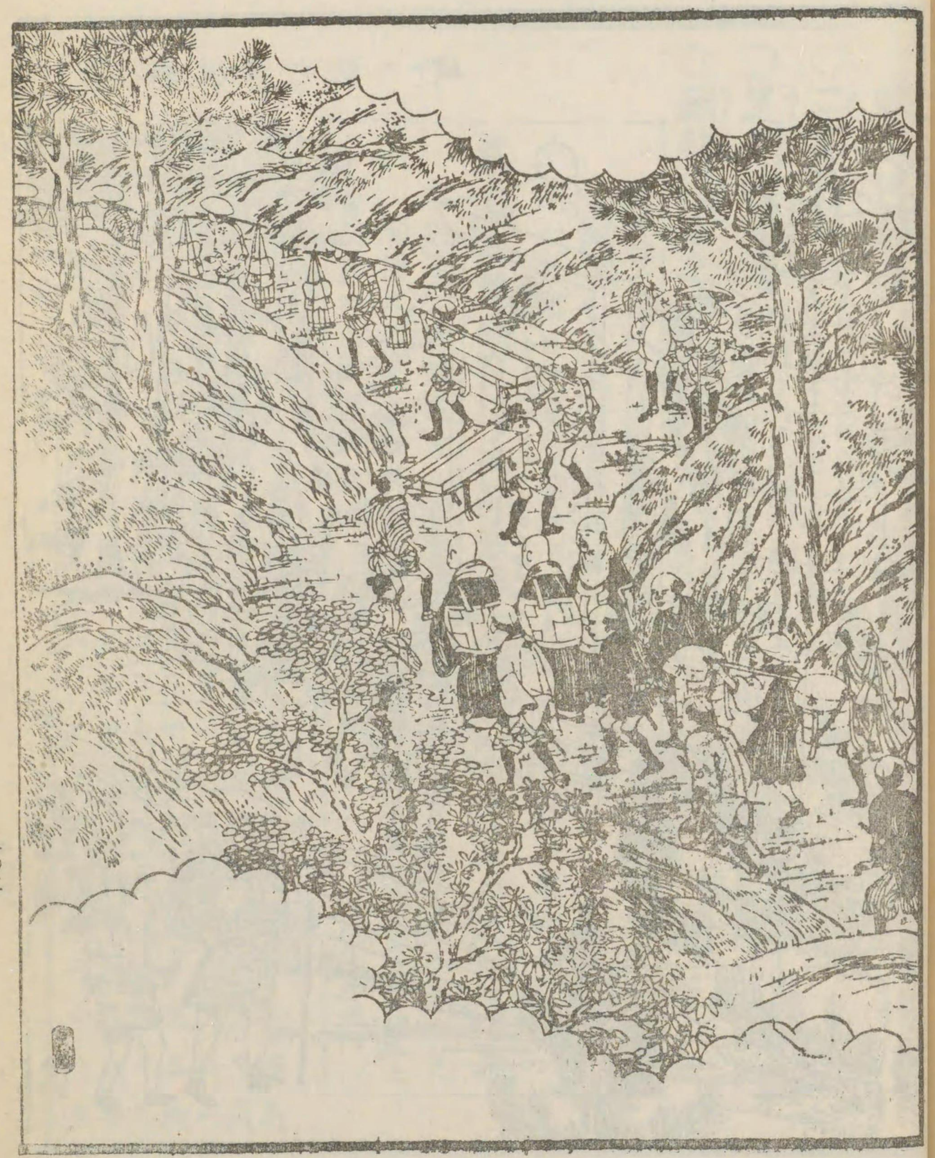
○吉野蔵王権現祠　右之

○弁慶力石　同上扁額吉野山

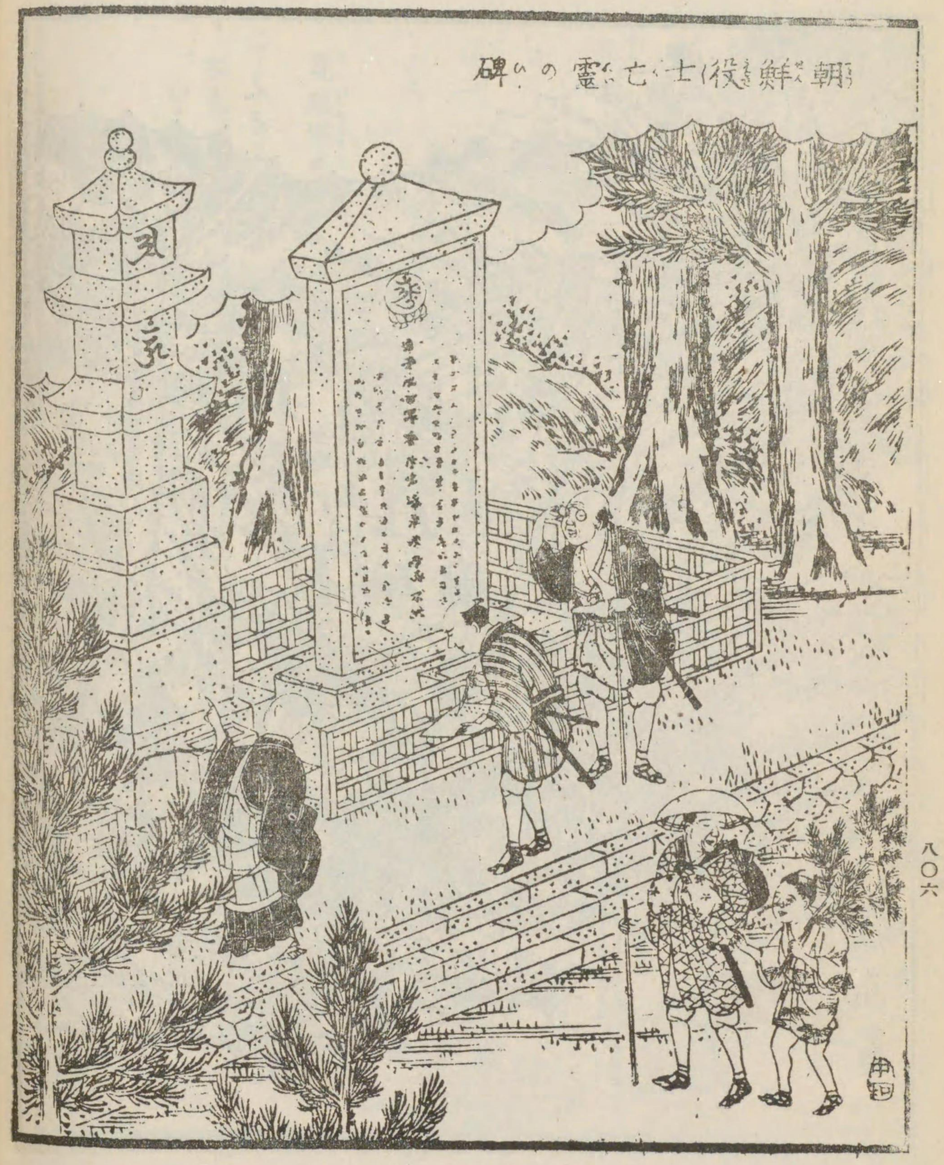
○貴鐵堂　同上扁額うん窟蔵堂とて弘仁運敞僧正の造り給ひしと

○弘法尊與教大師　寛保年中智山豊山の流使僧


だいし
大師の
くもつ
供物
を
おくの
奥
かく
院
ふ
運ぶ
ところ
覚鑁坂
こうみさく
根来の
むらし
郭公
大坂
永几



朝鮮役士亡靈の碑



○頻嶽地藏尊 同上淺野侯の碑ありし人力多かりし

○二番石塔 同上一基石塔上次ぐを紀ぐ

○芝刑地藏尊 同上一基羊猛地藏と云ふ癒を祈る者日々絶えず

○朝鮮役士之碑 高さ七尺巾二尺二寸位厚さ七寸ばかり

慶長二年八月十五日於全羅道南原表大明國軍兵數千騎被討捕之內至當手前四百二十人伐果畢

同十月朝日於慶尚衛泗川表大明人八万餘兵擊亡畢

為高麗國在陣之間敵味方鬪死軍兵皆令入佛道也

右於度々戰場味方士卒當り前乃伏被討者三千餘人海陸之間横死病死之輩具難記矣

薩州嶋津兵庫頭藤原朝臣義弘建之

慶長第四己亥六月上澣

忠恆

同子息

紀新塞之捷

慶長三年嶋津氏之守泗川也築海畔徙據之以為根本号曰新塞北築望津以扼晉江與新塞相距四十里又置永春昆陽等諸寨積穀東陽明董一元引軍抵晉州隔江而陣相持月餘明郭國安者降在望津與明將茅國器約為內應九月廿日國器勒兵渡江我兵臨岸防之寨中火起炎燄漲天衆驚而潰國器遂陷望津一元分兵攻永春昆陽縱火燒之我兵皆奔泗川一元進圍泗川二十八日

中井積善

守將血戰突圍奔新寨一元又焚東陽倉火不熄者兩日夜自虜之攻望津新寨將士屢請起援義弘不聽曰敵兵衆而氣銳難與爭不若固壘以逸待勞一元益進攻新寨將士皆奮欲邀戰義弘嚴令不許新寨一面臨海一面逼陸引海爲濠舸艦十數泊寨下一元素憚薩師疑其有謀退次泗川冬十月朔一元合兵二十萬復攻新寨自卯至巳其將彭信古用大煩擊寨門碎樓堞數處步兵逼濠拔柵爭登義弘隨機防禦殺傷過當鬨呼聲震地會虜煩發炸破火藥齊燃黑煙蔽空拔兵乘勢登門衝突嶋津忠恆鼓策先之信古兵三千殲焉餘衆披靡我兵尾而馳焉明遊軍茅國器葉邦榮率兵一萬擣虛傅城義弘逆料之團兵五千以待之至則齊出奮擊虜卻走其後軍將藍芳威望之先潰明軍大敗績我師追亡逐北至望津而返斬首三萬餘級

藤原千賡

○天の川辯才天祠

○熊野權現祠 日上

○閑院宮御宝塔

○一番石塔 日上

此五輪を崇源院殿の御石碑として駿河亞槐御母公御追福の爲ふ建させる所なり高き三丈趺石二間四方より巨き石の玉垣を繞らしこの山上億兆の碑碣ふ魁くるとして俗に番石塔とゝ大石を此危峰の巔ふしを登しし事雖ども難ども難ども

かくこの峥嶸たるみくの石碑けしの傾き倒れ

ゆくびるきく尋常の制ふあらざるべし

○芭蕉墓 日上

父母の恩ふ報ずるこゝ難し 雅子の句

芭蕉翁

○石濟水 同上 碑

[illegible]

雪中菴義太

○清水観音 右に

○雙輪塔 [illegible]造る無垢浄光陀羅尼経の所説[illegible]

○繼信忠信碑 各一基

○法然上人碑 [illegible]碑面の梵文並に源空の二字は上人自書[illegible]上人登山のとき[illegible]持[illegible]

奥の院[illegible]

香木の念珠[illegible]

○盥漱盤 右[illegible]を用ひて造る

[illegible]井川某の建立なり

○佐藤太碑 同上

○聲明地蔵尊 同上

○六孫王經基碑 同上 十八景

古今相逐伴深禪碑碣縱横草苔連家姓功名何所與山

雲石堂寂本

風山月又雲烟

故鵬子

○浅野内匠頭碑 同上 大石内蔵介の

○織田信長公碑 左よあり

○太閤秀吉公碑 同上 豊臣家の碑

○本阿彌七基石塔 同上 許多この辺ふあり一隅[illegible]鴻屠士の碑あり弘治元[illegible]卯十月廿九日卒と[illegible]今井宗薫當山一心院谷福生院か宮[illegible]建

○木食所 同上 姑射山の

火水地の漢字を鐫る

塔あるは空風

雨雪ふるあるる杉の葉[illegible]蔭と[illegible]四時あるがごとし

[illegible]大食の因由は大和国こ輪里平等寺の住職長弘

大徳當山[illegible]入て寂[illegible]一心院谷の蓮定院[illegible]

奥の院にまうづる道路ハ遥なれバ寺家の衆徒も志けく
しなけれバ只御廟のあたりハさ寂莫の地にしてすまゐせる
此堂を営ミ深く引ひすましてのちに穀味を断ちてくらし
きこゆる人木食長阿といふなむいひけるしハ此の其の庵を東林
院と号し弁蓮坊も此の寄に住快法上人より絶えず木
食の行をなす者多しとかや

狂歌大平楽

聞よりもまさりかうやの木食ハ霞をくらふ木の実かなると

玉雲斎貞右

○姑射山 木食所の後にあり此山ハ藐姑射山の形なれバ古来人間不通と云深き幽谷ありと云

○御供所 ハ広くあり毎日御廟に奉献の茶湯飯香花ごとく此処より調進す故に御供所といふ供物善美を尽せり大黒天辯才天を以て守護神とす
また大師自作の眼が持
しろまへ大黒天別にあり

こやぶてやまふかくしるべの、としどしかはらずおくへおと
してゆかまつさりしのぶすがたのみのひかりのがれどもと
供ましとのべんまうでしくぐらるのとどまりのゆめへつりし
ちりのまにおとゐこるのゆめをみしかまつしる

山家集

あらひのうへ花のくどものはそてありうつ世の人のことやぶそみて

西行

こともの飛郷つさりまのしき

曲坡

○護摩堂 右にあり頼朝卿の息貞暁僧都の創造といふ 本尊不動明王并高祖大師作 大師四十二歳の時の像といふ

○御室御庵室 同上道の東にあり今廃す

性信親王ここに住ませ給ひ覚法親王御再興ありて後性助
親王籠らせおはしましけるとなむ 緑に玉體の御影なかだち梅を
かざすよりはじめて蜀魂とききて紅葉をおがめ雪をえらしまへるも
後の世のためなりと深く人倫をいとひ山籠りし給ふ
幽ふききよせ給まへ山おろしぞ仏法僧の声のうらくなまくも聞えて
ゆかしき半雲の色かハりて奥の院の蘿洞の月ともにすま
せ給ふ御姿も今ハ名のみにてさびしきにそれを志る人なし都の蓮
法師も此の御跡をたづねしけるとて

そのころ後入道法親王あるかたへつかはしける

ほうこう　ある書に谷はぞのをとうづれども　出示德院御製
ちくれあるこゑの絶えぬ初の日やとぶらん　覺性法親王
續拾遺　入乃京釈迦堂の北の方に侍りける頃の事
いくとせの秋の夜ぶかしぐるるん都にかへるこゑぞ　中務卿宗尊親王
はうこう
まぐらうん　れのうふ　りひしまとる　ぬのこゑぞかなしき
出觀集　山端よりかくよく月をながめかなしみのこゑ世をひとりあさ　入道二品親王性助

○靜蓮法師庵室跡　地詳

續千載　（誰もこれ家の名ぞ）とこたへもんとまりしかとの庵ぞ　權大納言實國

○求聞持堂　日上　本尊虛空藏菩薩　大治年中平泉上人の創建なる山門修復堂塔增進のよし法華修

一條天皇御宇上人

○斷食所　日上　古へ煙竜堂の北の西の方にあり　浅右記のりのふ斷食を行ずともく穀味を斷くへ佛經を讀者とゝ　七日

斷食のこゝの拔木再榮の稱のこゝふ今岡智

三藏

○參籠所　日上　上古へ御室御參籠所　法並御膳所

奥の院へ御參籠ありてそ大師の入定の窟をひらせ給ふ人ハ出家の
日とふくゝて諭伽上人の埋をあらゝ山花を繞く赤肉中臺
の相を絵と新佛の化縁を感ぬとゝ時の説今耳よあるかと
ゆゝしく慈尊の出世を遥に待ふ暫の御製あり
ふゝ二月十七日奥院ふ四夜あてゝ吹出せうを一首の御製あり

○水手向所　同上　備國秀衡の伝人盤水ふ安年中織田三郎信長奴隷と

續門葉　思ふ事やとるの流を汲て　法眼覺親

○明遍杉　日上　御廟檜の傍

我大師の御持ふ杖と杖檜の傍ふ則上人の入滅上人赤木ふて如例
と果ゝ諏芽を生ず　覺性法親王
ゆゝしふ杖檜より内を見茶羅の法を受ふ
あかけまとる赤ひ檜のかくゝよう遥拝しうふ
ゆゝしくとねゝくゝくゝ
ゆゝしくとらざりて出る枝の下ゝ　光廣

○御廟橋 御影の西南に架せり 俗にごべうの橋ともいふ

此橋板三十七枚は蓋金剛界會の三十七尊に表し裏面に一々其種子を書す故に犯罪障ある人は是を渡る事をえず法性寺相國の再造したまふ所なりむかし延喜年中観賢僧正大師を拜し帰りたまふとき大師この橋まで送りたまひていはく我今汝が本有の佛性を送る只汝のみにかぎらず都て参詣の道俗有縁の輩を送りたまふ常にかくのごとし猶遠くは極樂浄土に送るなりとぞ又昔時豊臣秀吉公當山にまうでたまひし夜應其上人をして御供なしこの橋を渡りたまひ直に帰らんとしたまふ上人あきらめて御廟まで申されしかば太閤のたまふやう罪障ふかき者は此橋を渡る事能はずと是まで我今天下を掌握するといへども人を殺す事數多の人を害せ明日列侯をあひて詣でむとさ此橋をわたり得ず

いかなりの恥辱なしとやおもひく此夜熟ら我万民のうらみを亂徒を平らげし佛意にかなひてありぬまた猶束帯してこそ見てまいらせんとて翌日橋をわたりたまひしに御供の諸侯をかへりみていはく橋は渡られしか秀吉が罪なきをもしられたることのうれしくぞ滑稽にして衆生を卒させしにこそ

熊野老人南山紀行

御廟橋者一片ノ板棧云々 昔者豊公之桀驁猶畏縮移時 今白面書生舞踏過之 世態之變人情可見

十八景 廟前幽橋

岩水激來一澗流 板橋相架境清幽 行人蹴踏過猶顧 下烟霞古木稠 雲石堂宗沐

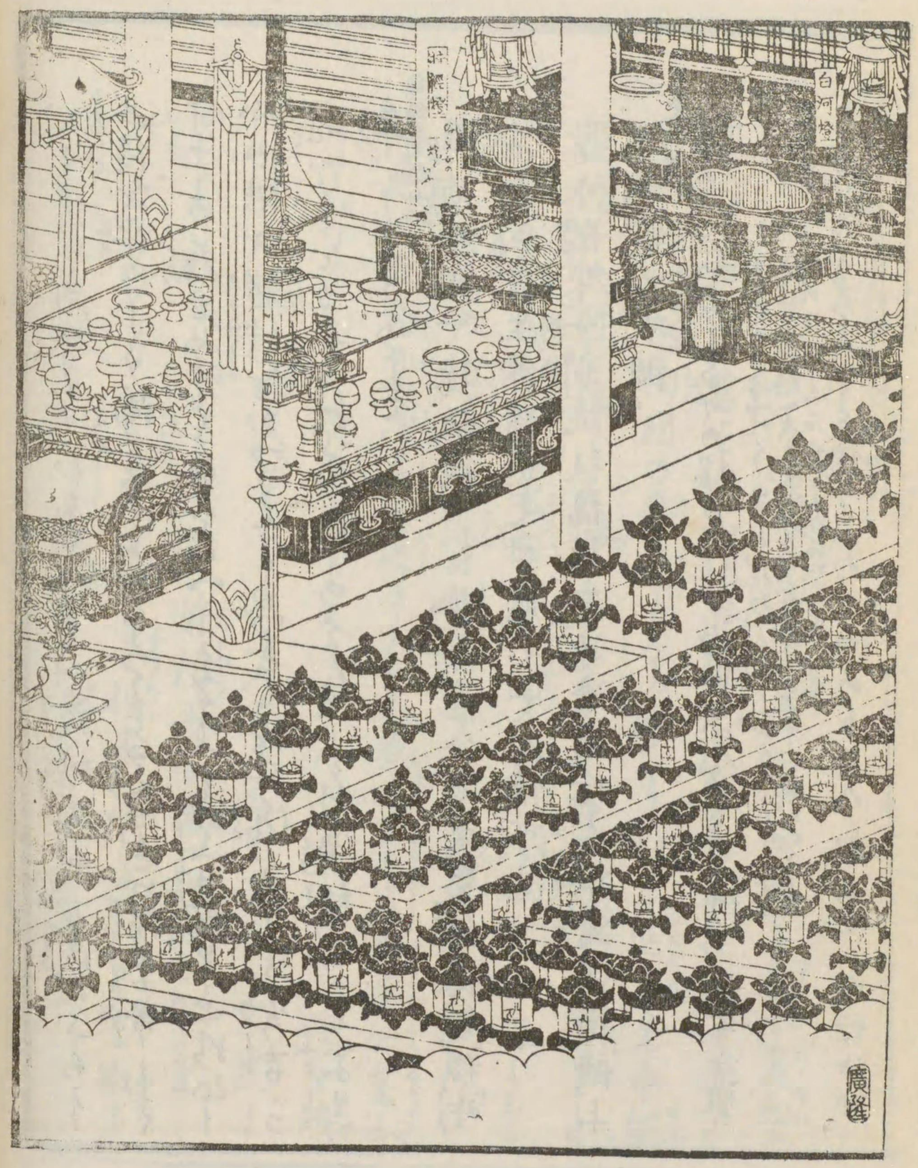
夫木抄 御集 みの世橋

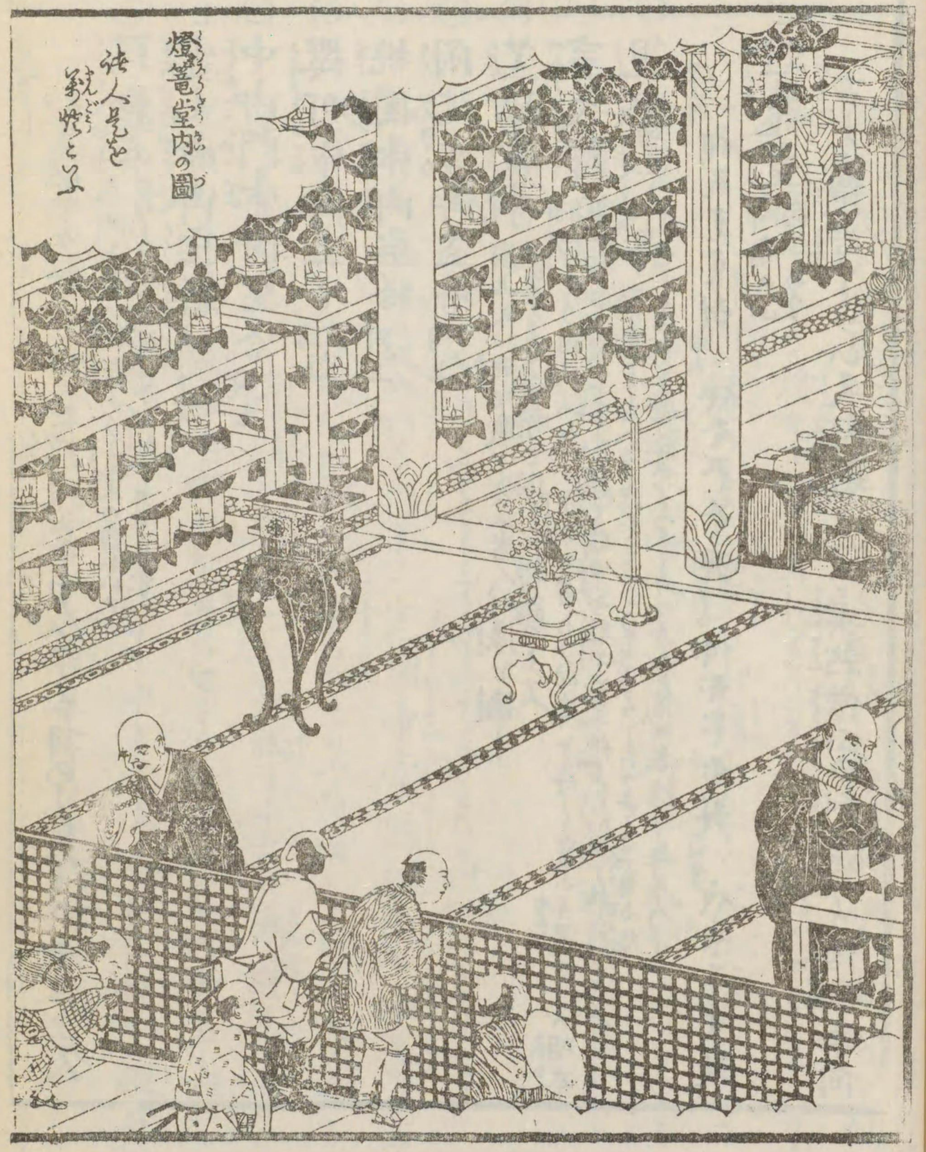
あはれやこの世にかゝるの橋かゝりむきもやはらぶながるらん 法性寺入道関白

[illegible]

山家集

ことなく君ひきうる橋のもとおもふすりのこの月の紀のとこ 西行法師


白河燈


燈籠堂内の圖
法人ともを
勤めとる

ちりひやるかもみぢそ樹れ不多ひ〻る月のゆけば〻　西住上人

○彌勒石　左側ハ秘説ハ小堂の内ハ幾字のかゝちを事

○霊元帝御宝塔　同上

○中御門帝御宝塔　同上

○櫻町帝御宝塔　同上

○桃園帝御宝塔　同上

○閑院宮御宝塔　同上

○笠地蔵尊　同上又ハ麻地蔵　渚人此像と撫〻

○盲大師　泥像　その手にて病所と撫ハ忽愈と云

○親鸞上人碑　碑前　何ゝ　同左　何ゝ　同背　何ゝ

○燈籠堂　御廟の西面

古ゝ禮堂ゝゝひ又拜殿ゝゝ眞然僧正の創造なり治安年間

禪定殿下道長公再造ゝ　鳥羽帝初ゝ常燈を献じたまひしゝより燈籠堂の名起ゝ　怪明の印法眞大師御在世のとき深重の御願ゝ万燈會を設せ給ふ文世ゝ著ゝ御入定のゝち祈親上人燈を讃て更ゝ一燈を挑ぐる野明神を悦ぐ形現ゝ上人ふ和歌を詠ゝ

我ゝ

かゝ上人修造のゝ因ゝ　光明帝常照和尚の謚を給ふ

今中央ふ一大燈を挑ぐ持経燈といふ持経ゝ彼上人の号ふまぐ是をゝ遺列を燈ふ古ハ萬燈會手ふ

ゝ法ゝふ鼻祖の御徳を慕ゝ　白河法皇御幸臨のときハ三萬燈を献ぐ中ゝを御手自一燈を挑げゝ東の方持経燈ゝ對す一大燈是なり白河燈ゝ又

神君更ふ御力を添へ給ひ、永く此會の斷絶せざらしむ
法式を定めらるゝ事、一切海内の信男信女日夜ふ瓊貨を拋
く終ふ永世不退轉の萬燈會とかなれり

續千載　弘安元年百首哥奉る時　大納言

さゝなみやびさはのほとりあかしげてもそ世の山はれける　道二品親王

御願のおれ堂燈明を數なくひかるきもえも
いとゞ行ふ出あひく大師の法華の法會

雪玉集

あつぶそこゝろふいく〜こゝる世山ひかり出ぬ宝の舟ふる　實隆

法華拾　六帖題　法師

こゝる世山あけむ光をまつ人のあぶれ夜さえめけの燈火　知家

新拾集　秋歌

こゝる世山あつこゝをくまのゝよ見えりとはしれとり火　二品親王性勝

拾下集　晩更燈

たゝりの山後ろけふ天の宮ゆ知ひ〜くをぶやのれ灯火　正廣

萬燈堂賦　和詩一絶　其柏亭悟友

朧ふ氣の富ふとも清貧ぞ潔さ千載の今も猶一燈の影高〜　塊亭凡悟

万燈おくる五月のやゝもる〜

○持經上人碑　燈籠堂の

○御所芝　瑞離の西の東の方ふあり天子臨幸のとき此ふて御廟を拜しまつる人

堀河院納髮の碑　白川法皇の往碑　関白

碑　時あり

○應其上人五輪塔　瑞離の西の方ふあり銘文長〜
享年日名禄享五仲秋二十三日建之

○覺智碑　同上ふの

○骨堂　此廟の右檀下ふあり八角造の堂なり今あり所へ
元和年中松下河内守元綱朝臣の造立なり

天下の緇素ふ遺骨を所々の靈區ふ置といへども此堂ふをさ
めむ者多くして古くより其例ふ〜即大師の御記ふ我山
ふ贈る所の亡者は舍利も我毎日三密の加持力とりわく
先安養宝刹ふ送り當來ふ成ふ我山ふ惡事説法の
聽衆の菩薩ふ〜と書しまひ東福寺虎関が元亨釈
書ふ國俗亡人の骨を以て高野ふ空しむ弘法大師の
龍花三會の大定ふ伴むといへ抑當山ふ日本ふ九
品の淨土あるゆ中ふ上品の上生ふあり携ふる靈崛ふ
多ふ身骨とゝゝめむ輩ふ有緑の盃ふあづかるむ寛

治手中ハ東寺の定額僧正勝寶ふしの讃及善通寺の
別當ハかなくく下向あるく時彼寺ハ御筆の一紙を
得せしめ

ト居於高野樹下　遊神於兜率雲上

不顧日々之影響　撿知處々之遺跡

かくそえ〳〵ハ高祖草創の名利と望む人ハ巨益空〳〵ハ
中〳〵ハ眼のいろハ入定留身の地の尊きを知〳〵ハ世業を
亡者の為ハ帰依の院々〳〵日牌月牌を〳〵長く法号を此
山内ハ留ハ五十六億下生の曉まで晨夕の回向ハいとうハ功徳
莫大なるべし

大長院　ゑ　せ　ま　ひ　く　の　ち　ま　ふ　山　ま

新後撰

ハも又ゆかるやうの此山ハ　　貞空上人

飛のくれ山ハ[illegible]ハ[illegible]の[illegible]ハ　　實隆公

この山ハ[illegible]

同

[illegible]

同

[illegible]

同

[illegible]

同　　同

[illegible]

室町殿物語

[illegible]

同

[illegible]

同　　同

惺窩文集

[illegible]

栗園家集

[illegible]

○閑伽井

○看經所　日上

白　主

○一切經藏 燈籠堂の艮方にあり

○丹生高野両大明神 御廟の傍にあり天暦七年雅真大徳の創造なり

○霊鳥 往昔より御廟の辺に一双の鳥あり眼金色にして足の爪赤し号て天鳥といふ今に御供所より日々に餌を與ふ此鳥一山に禍あらんときは兆をしらしめて食せずとなむ俗に熊野鳥といふ道範阿闍梨秘記に云奥院の鳥は天照太神の使令也

○佛法僧鳥 一名三宝鳥といふ當山及び紀光比叡松の尾鳳来寺などの深山幽谷に産す此鳥雄は形鳩のごとく瘦て小さく尾の端黒色嘴細く脚ともに赤色なり鳴声ブツポウソウといふ契沖阿闍梨のいはく佛法僧鳥のなくなるは紀にはさやかならずさるは三ツ名なるそのなく声にひさく似たるとうけたまはる性霊集便蒙に當山にて親聞于南山峯其声似呼佛法僧とあるなり當山にて八時夜のゆふがたなどにあかくなりて聲をこく唯る雄とおもしき形して今見る所は深緑にて白毛まじりて漆黒の斑なり喉及び腹白く黒点あり嘴淡紅にして脚淡褐なり詳に挑洞遺筆に辨あり近古建久なぞより都にも鳴しれと古書に見えたり

弁内侍日記

よふかくてかしこき君がみよなれやこゝの宝れ鳥も鳴なり

御集

わがみには法いかにしこきくとて鳥も仏法僧とそなけ　後鳥羽院御製

待くらし鳥も御法をあふひの声きるや高野のおく明の月　豊臣太閤

高野山にまゐりて仏法僧といふ鳥の声をきゝて其大師の作とされる閑林獨坐草堂暁三宝之声聞一鳥一鳥有声人有心声心雲水俱了々といふ詩をおもひ出て

かくなる二の宝れ名をよび鳥もうき世の夢覚んとや　蘿満

浮世をば夢とみてしかの尾ふるもんやえの月　芳樹麻呂

○萬年草　御殿の辺りに生ずる苔の類にして根蔓ありて出でて枕ふ也とぞ苔草の葉多く繁生す撮りて結へば長き手と成るとぞ

一名山菅　葉は菅に似て細長く紙のごとく繊維ありて結へば長き手と成るとぞ

俗称　婦人の髪結ひ用ひて結へば長き手と成るとぞ

人参　しらとりとぞ又日光山の名産竹ハ一名玉指一名玉逐ともいふ

終南師遺稿　卒陀宮殿倚山巓削出芙蓉八葉蓮脉起青龍衍東域祕開鐵塔見南天珍禽曉唱呼三室草長栄保萬年登陟高起法雲外此身疑是證金仙

○三山　もふ美作の西北にあり昔日景足の峯と深き故ふ此山を景峯とも

轉軸山　揚柳山　摩尼山

十八景　揚轉摩尼三箇山峻嶋相對挿天間朝々暮々欲為雨一昂蒸揚雲往還　雲石堂宋本

○御廟　一ふ禪定の洞とも歌に岩の室苔の洞ふとよめり

寂々と苔うす赤の実ろもるもるー　塊亭

南面ー宝形造り彩色素質の結構陰然として古檜老杉の際に拝せしめ拝参の人肅々容を改め忽ち塵累を絶ぬ

仁明天皇嘉和二年三月十五日大師告ぐ曰吾去成ぬ

天長九年十二月十二日より穀味を厭ひ専座禪を好む皆今法文住の勝計未世の弟子等の為なり方今諸の弟子謙よ聞け吾生期今幾程なるぞ汝等能く住し教法を護ー吾入滅の後今月廿一日寅刻なるべー諸弟子聚ー悲哀すー手勿れ吾滅しなば信を両部の三宝に帰せよ自然我が代々眷顧を蒙むる吾生年六十二夏臘四十一也吾未一百歳ふまで世に住し教法を護ー奉らむとすー

ひしーう今は却く諸弟子等と頼く急ぐべし即世せむとすー

ろ給ひ果ー三月廿一日寅刻結跏趺坐して大日の定印と

結び奄然として入定しぬ人並日一旬の間四時の御行法あり
間御弟子達彌勒の宇号を唱へ開目して言語なく入定す
同廿五日　仁明帝勅使を以て賻を賜ふ太上天皇嵯峨院
使を以て吊書を賜ふ其文に曰
真言洪匿密教宗師邦家憑其護持動植荷其攝念豈
圖嶮嵒迫無常遽侵仁舟慶棹弱喪失飯嗚呼哀哉
禪關僻左問晩傳不能使者奔赴相助荼毘言之為
恨悵恨曷已思忸舊窟悲涼可料今者遥寄單言吊之
著録弟子入室桑門悽愴奈何兼以達旨
餘親王公卿貴賤道俗離別の悲歎嬰兒の悲母を失つる
如し漸七々日の御忌ふ迫び尊容を拜見するふ顔色衰
へ給ず鬢髮更ふ長ど依依別除して衣裳を整へ宝輿ふ
乗せ奉る實惠真雅真濟真如真然真紹ふの諸德共ふ肩り

駕して奥院ふ移し奉る供奉の御弟子一萬餘人その外
結縁の道俗數を忘れ摩尼峯の下姑射山ふ對して石室
を設け定身を安く奉り上ふ五輪の塔婆を置き佛舍
利を安く又宝塔を建て種々の梵本陀羅尼を納む皆ども
真然大德の營みなり　文德天皇天安元年贈大僧正
清和天皇貞觀六年法印大和尚位を贈る
醍醐天皇の御宇　寛平法皇及び僧正觀賢の奏聞ふ
弘法大師の謚号を賜ふ改めて延喜廿年十月廿一日の夜
の御夢ふ告て曰
[illegible]
帝大ふ感歎して即赦色の法衣を賜ふ廟使ふの石山
の觀賢　勅使ふ少納言平惟助を以て告ふ　共ふ同廿七日
（但今賫勅書於少納言惟助發遣于紀伊國金剛峯寺云々）　詔曰琴絃已絶遺音[illegible]

65
9

叢雖凋。餘芳猶播。故贈大僧正、法印大和尚位空海。消疲煩惱。抛欲驕貪。全三十七品之修行。九十六種之邪見。既而佛日西没。渡溟海而仰餘輝。法水東流。通陵谷而導清浪。受密語者多。満山林。習真趣者自成淵藪。況　太上法皇。既味其道。追憶其人。誠雖浮天之洪濤。何忘積石之源本。宜加崇飾之典。謚弘法大師。勅使詔書を讀竟ぬ。廟中に聲々我昔遇薩埵親悉傳。印明發無比誓願。陪邊地異域。肉身證三昧。待慈氏下生。晝夜愍萬民。任普賢悲情。と唱へ終る。僧正勅賜の御衣を捧げ〻廟内に入り尊容を拜し奉る。顔色変ぜず儼然として生時のごとし。即頭髪を剃除し衣裳を覆い奉る。永く秘封を粤に石山の内供淳祐いまだ童形にて僧正に従い石室に入り尊容を拜する事をえず。僧正祐の手を取り御膝を撫でめぐらし其手生涯異香消ぜずと云。碑に昔内供所持の聖教の手の香ばしく匂いの聖骨と云ひ伝へ今の御廟に村上天皇の御宇。一百四十年に相傳に嘉吉年間一休和尚登山のとき奥院に弘法の虚空の定に入るもいまだ虚空も定もなきものとなり空と定に入れと詠ぜしに廟中に色あり〻と和尚感伏〻〻

紀伊國名所圖繪之編六之巻終

65
9

昭和十二年四月十九日印刷
昭和十二年四月廿五日發行　非賣品

和歌山縣和歌山市大泉寺町五番地
編輯兼發行者　貴志康親

和歌山縣和歌山市豊原町一丁目三番地
印刷者　初田政男

和歌山縣和歌山市豊原町一丁目三番地
印刷所　初田印刷所

和歌山縣和歌山市片岡町二丁目八番地
製本所　增井保次郎

不許複製

6
9

鈴木藏書

698
95